

## 書き物にさせると”荒っぽい否定”はしにくくなる

---

“アイデアポリッシャー（磨くもの）であれ。

アイデアキラー（壊すもの）でなく。”

---

### 思いつきで否定しない

知的な議論ステップを踏むことが面倒な人は、懸念要因の提示の際によりエモーショナルな強い否定の言葉を出す傾向があります。また、気はいい人なのに概念提示能力に自信がない人は、自分のコメント（懸念点の提示）が“皆に受け入れていないのでは？”という不安さがあり、コメントの強調（過剰な否定）となっていくところがあります。

例えば口下手なマネージャー。部下達のアイデアをブラッシュアップしてあげたくて議論に加わり、いつのまにかアイデアを皆が諦めてしまう（アイデアを殺してしまう）。内心『あー、きつく言い過ぎてしまった…』という状態です。

一方、創造的な組織活動を展開している開発マネージャーには一つの共通点があります。彼らは、懸念点の提示をするときに、非常に良くデザインされた言葉を使います。思いつきの荒っぽい否定語ではなく、アイデアや試作品の改善のための材料になっています。

そうした能力のある人に近いことをする、割と簡単な方法があります。

### 懸念事項を紙片に書く

場にフィードバックしようと思っていることを紙片に書く。そして客観的に見る。すると「これは誤解されるな」「悪い点の指摘だけになってしまっている。もっとよくするための材料、として表現しなおすならば、こうかな」ということを考慮できるようになります。

慣れると、頭の中でも書き直すような行為をしていることに気が付くでしょう。コメントを「ブラッシュアップの材料」としてうまく提示できるようになります。

## マネージャーだけではなく、皆が書く

「人は書き物にさせると”荒っぽい否定”はしにくくなる」という特性があります。エモーショナルな表現は書き物にしにくく、自然と考慮された表現になります（それでも出ますが、ぐっと減ります）。アイデア会議などのシーン、懸念点を出す際に「紙片に書いてもらう」ことでより考慮された懸念点としての提示ができるようになります。

荒っぽい研磨は、時に原石を壊してしまいます。「駄目だし」というのは「できない理由探し」という姿勢ではなく「より良くするための材料を見つける」という姿勢が大事です。

補足：

そうは言ってもブレスト（アイデア出しの会議）で、否定がついついでてしまう、という組織もあるでしょう。そういう場合に、上記の「書く行為」に相性のいい、書き物系のアイデア会議の方法があります。

- ・ブレインライティング
- ・ぐるぐるマインドマップ（まだ、一般の認知度がありませんが）
- ・ランダム再分配ブレスト（まだ、一般の認知度がありませんが）

などなど。これらは、どれも書き物をベースとしているので、どうしても否定したい人がいたなら、否定を”書き込む”ことしかできないわけで、これはハードルの高い「場の約束事への違反行為」のなので、批判はほとんど起こりません。

あるいは、ブレスト（口頭でのアイデア出し）とブレインライティング（書き物 100%のアイデア出し）の中間として

- ・フリップボード・ブレインストーミング（フリップボード＋ラウンドロビン）

もあります。これは発言者が考えをまとめておきやすい、という利点があります。